SEA Forumに参加して

障害者と
技術者が
コンピュータ、
ネットワークを
めぐって議論

広重隆樹（ひろしげたかき）：談

東京在住のフリーランス・ライター。おもにリクルート社の就職情報誌、「Bing」「Technology Bing」などで、サラリーマンの転職や人材需要の動き、技術動向などをレポートする。毎年9月の障害者雇用促進月間に合わせて「Bing」「とらばーゆ」が展開する雇用促進キャンペーン企画記事を3年にわたって担当。プロップとの出会いは、2年前の「Technology Bing」誌で「障害者とコンピュータ」をテーマに記事を書く際、竹中さんを取材したのがきっかけ。趣味のMacintosh 遊びが高じて、最近は MACLIFE にソフトのレビュー記事を執筆するハメに。95年早々には Macintosh 本を一冊出版する予定。

障害者の自立のためにコンピュータを活用しよう——プロップの考え方に惹かれ、その活動を外野から見守ってきた。障害者のコミュニケーション手段としてのコンピュータやOA機器にも少しばかり関心がある。かつて障害者雇用の取材の現場で職場との連絡にFAXをフル活用する聴覚障害のオフィスワーカーに出会った。ときどきアクセスするパソコン通信の朝日ネットで、誤字の一つもないメッセージをアップした人が、実は全盲の障害者だったと聞いて驚いたこともある。

コンピュータや通信が障害者の社会参加を広げるツールになっていることを実感する。けれども、**使用者の環境を整備するメーカーや技術者の視野に障害者のことがどの程度見えているのか**、それが以前から疑問だった。

そんな折り、竹中さんに誘われて、東京で開かれた**「SEA Forum October94・障害者と計算機＋ネットワーク」**（94年10月18日・後楽園会館）に出かけることになった。不勉強で、実はSoftware Engineers Asociation ソフトウェア技術者協会（SEA）のことはこの会合に出るまで知らなかった。ソフトハウスや大学、研究所などにいるソフト技術者が、組織の壁を越えて経験や技術を交流し合うための場で、設立は9年前に遡るという。

代表幹事の中野秀男先生の司会で、まず日本障害者雇用促進協会の丹直利さんが、「障害者とコンピュータ・ネットワーク」と題して、障害者のパソコンやパソコン通信利用の現状と課題について講演した。特に僕が興味を惹かれたのは、マルチメディアと障害者というテーマだ。丹さんは、**「今のマルチメディアは『目が見える』ことを前提に動いているような気がする。産業優先でかけ声ばかりが先行しているが、今の段階で障害者の利用という視点を組み込んでいかないと、盲聾者が情報から取り残されることになる」**と指摘した。

僕も最近、ダイヤルアップでインターネットに繋ぐことができるようになり、WWWサーバーにアクセスしては「うーむ、面白い！」とかウナっているのだが、その時はすっかり視覚障害者のことは忘れている。マルチメディアは「感覚の組み換え」（西垣通氏の言葉）を促す新しいメディアだとされる。けれどもそこで言われる「五感」とは、やはり健常者のものだけではないのか……。

そんなことをツラツラ考えていると、いきなりナミねぇの大声で目を覚まされた。竹中さんの演題は「身障者の就労を支援するボランティア団体の活動」。つまりプロップの活動の紹介なのだが、桜井さんの就労をめぐる大阪府との交渉、朝日新聞へのアドバイスの話など、「ぶっちゃけ話」を含めてかなり具体的なものだった。彼女が強調したのは、**「これまで障害者関係の集まりというと、いわゆる福祉系の人ばかり。技術者と交流することで新しいフェイズが生まれる」**ということである。

後半は、プロップメンバーで日本DECに就職した安東直哉さんを交えてのパネル・ディスカッション。中野先生が上手にまとめていたけれども、議論のテーマは「障害者にとって便利なコンピュータとは」「障害者のコンピュータ利用をめぐって官庁、企業、ボランティアの役割とは」「ネットワーク社会と障害者の問題」「障害者の就労の仕組みをどう変えるか」——そんなところに絞られた。

安東さんは、使いやすいマウスやトラックボールを探し求めて日本橋や秋葉原を歩いた経験を披露してくれた。ナミねぇが**「障害者向けのコンピュータ開発のために国の助成は少なすぎる。フリーウェアの開発などは助成の対象にならない」**と指摘すると、中野先生や丹さんも**「技術者、研究者同士の横のつながりが足りない」**と課題をあげていた。会場の技術者からも「まだまだソフト技術者と障害者の接点が見えない」という声があがったりした。

けれども、今回のフォーラムのように、障害者と技術者が共通のテーマで語り合うのは初めての試みだ。こうした経験の積み重ねが、いつかは企業の開発現場に反映され、行政をもつき動かすことになるだろう。その萌芽が生まれつつある、と思った。